

## IV 1994年度の教材開発

### 1. チーム A の教材開発

「相撲」と「野球」でお互いを理解しよう

### 2. チーム B の教材開発

まい・めぐ・けんたのドキドキホームステイ  
～家電製品からみた日米の衣食住～

### 3. チーム C の教材開発

日本とアメリカの中学生の放課後の過ごし方の比較  
～日本とアメリカの生活の背景にあるものは？～

### 4. チーム D の教材開発

年中行事にみる多民族社会「アメリカ合衆国」

### 5. チーム E の教材開発

クイズで知ろう！ アメリカの高校生の夏休み

### 6. チーム F の教材開発

日米の食文化

## 「相撲」と「野球」でお互いを理解しよう

広島県東広島市立東西条小学校

生田 一人

広島県東広島市立高美が丘小学校

津森 裕

広島県広島市立瀬野川中学校

小田原順藏

### 《教材作成の意図と活用についてのお願い》

この教材は、小学校高学年児童ならびに中学校の生徒を対象とした国際理解教育の実践のために開発されました。

教材の作成にあたって、わたしたちは次のようなことに留意してきました。

- ・児童生徒にとって興味関心のもてるような素材をつかうこと。
- ・日本でもアメリカでも、お互いの国の文化理解のために使えるようにすること。
- ・教材の全体を丸ごと活用できるだけでなく、一部分を取り上げても国際理解教育の実践に活用できること。
- ・文章や資料、グラフなどを、児童の実態に応じてさまざまな形での活用方法ができること。

「相撲」と「野球」を素材として取り上げた理由は、いずれも日本とアメリカの歴史と文化を代表することのできるスポーツだと考えたからです。

教材開発のための調査は、次の3点を中心に行いました。

- ・予備調査として、日本とアメリカの児童生徒を対象に、アンケートを実施しました。
- ・アメリカでの現地調査では、アメリカの児童生徒を対象にした“SUMO = SCH OOL”を実施して、相撲についての理解を深めるようにしました。
- ・さらに、アメリカの人々に直接インタビューする中で、野球やアメリカンフットボールなどに代表されるスポーツに対する考え方を調査しました。

教材の中では、日本の3人の子供達がアメリカに行って異文化を体験していく、という物語風の構成をとりました。これは、学習者が教材の内容によりとけこみやすくするためにです。したがって、ワークシートのような形式にはなっていません。

具体的には、小学校高学年の社会科の授業（とくに6年生の世界の国々とのつながりの単元や5年生の情報通信の単元）や国語の説明文（野球とベースボール、外来語と文化などの説明文）で活用いただけると考えます。中学校では、社会科のほかに英語や特別活動でさまざまに活用していただけると思います。

実際の使用に際しては、その目的や単元、実態に応じて、内容を選択されてもよいと考えます。さらに、資料として付け加えたものを補助的に活用されてもけっこうです。

また、ここに掲載した資料の原本や出典、ならびに写真・VTRの活用のご希望がありましたら、当研究会までご連絡ください。

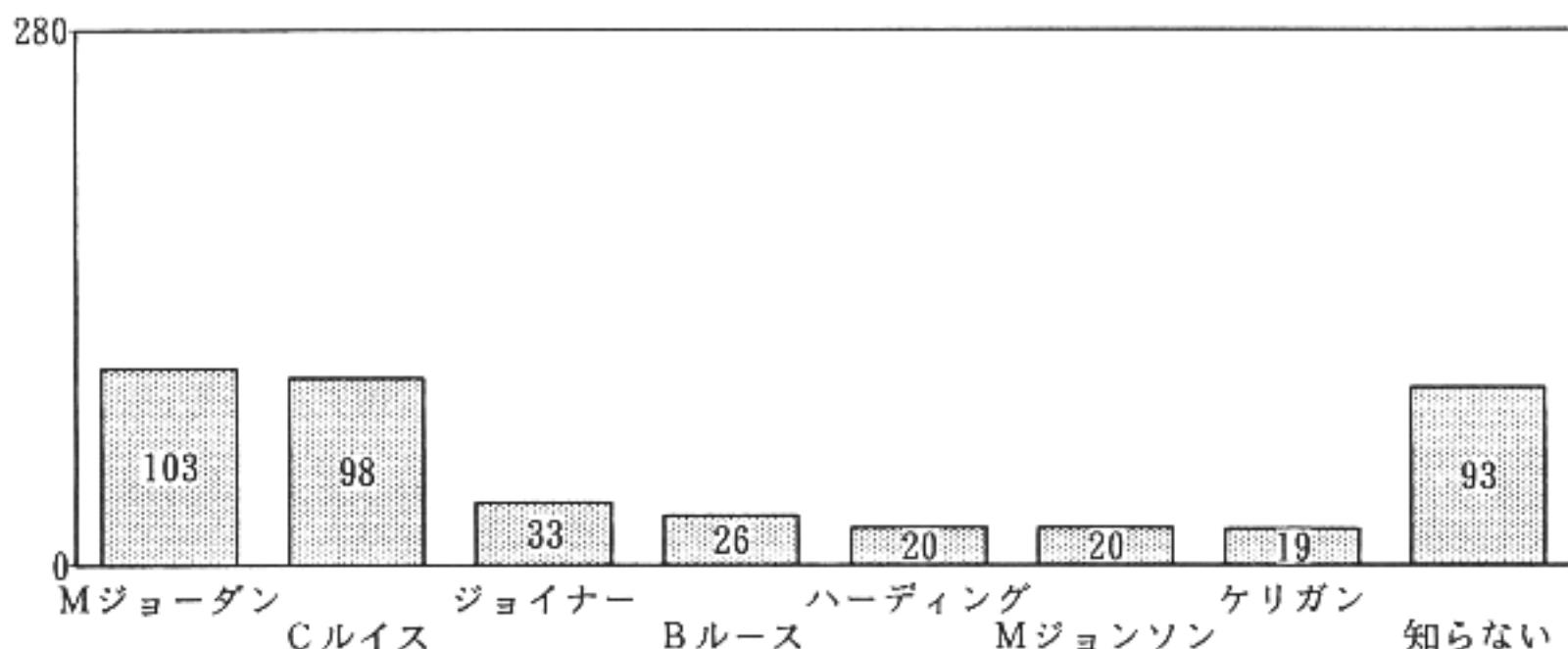
☆アンケートで比較する  
日米の子どもとスポーツ☆  
日本の小中学生に次のような質問をしました。

**Q1 アメリカ（日本）のスポーツ選手で知っている人物の名前を答えてください。**

(表1)が、日本の小中学生が知っていたアメリカのスポーツ選手です。およそ3分の2の子供が、アメリカ人のスポーツ選手を知っていました。これに対して、アメリカの小中学生のうち、実在の日本人選手を知っていたのは、わずかに3%で、しかもその回答はすべて「王貞治」でした。スポーツ情報がアメリカから日本へかなり一方的に流れている結果でしょう。

知っているスポーツ選手(表1)

(単位：人)

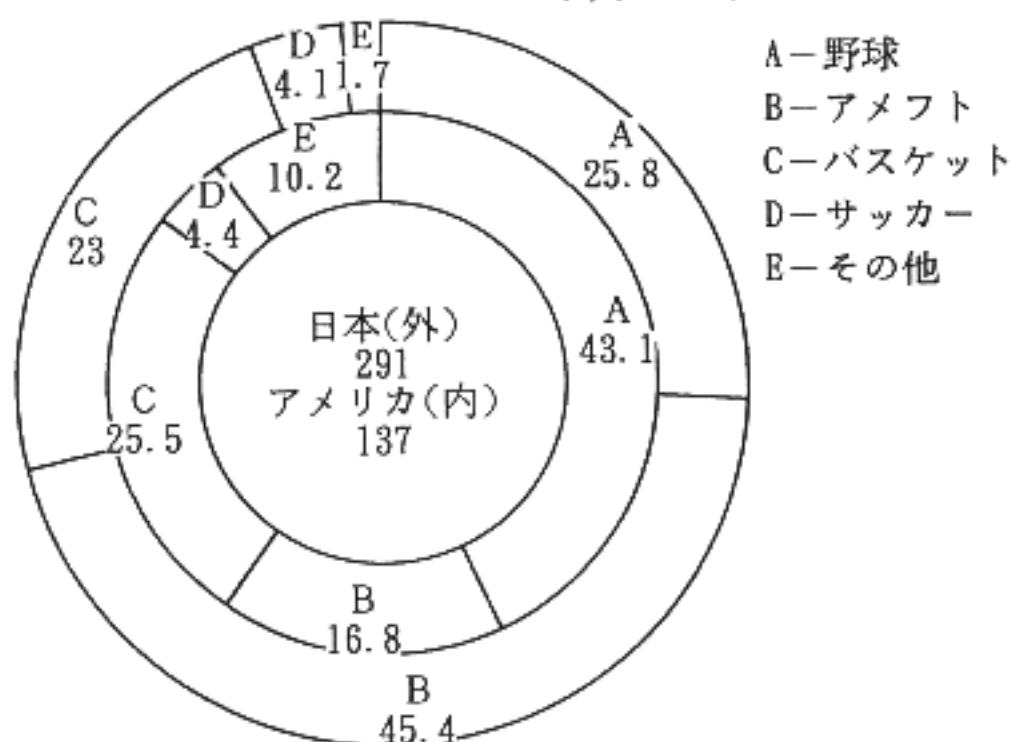


**Q2 アメリカの国技は何だと思いますか。**

(表2)がその結果です。意見は「野球」「バスケットボール」「アメリカンフットボール」の3つに分かれました。

アメリカの国技(表2)

(単位：%)



**Q3 なりたいスポーツ選手は何ですか。**

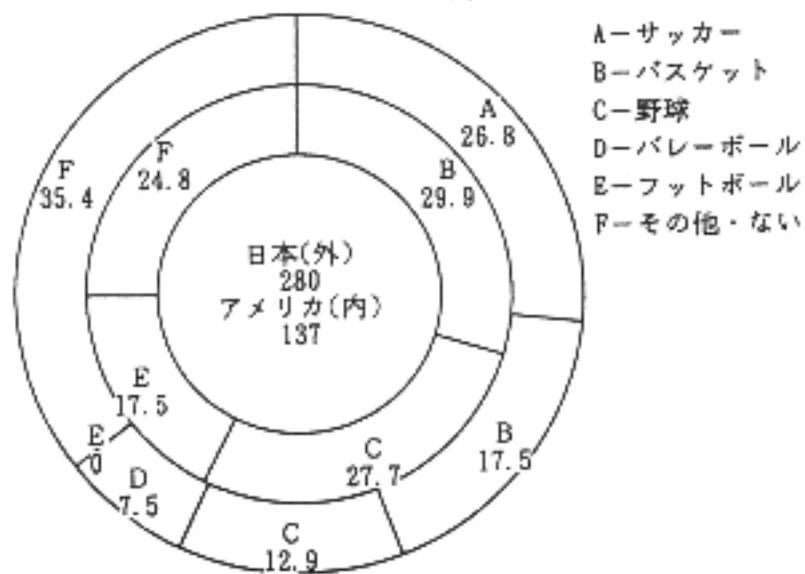
(表3) アメリカの子供達の希望はやはり三大スポーツに集中しています。日本では「サッカー」「バスケットボール」「野球」の順ですが、日本の国技「相撲」は0でした。

**Q4 ふだんよくするスポーツは何ですか。**

(表4) これも同じような結果が出ています。

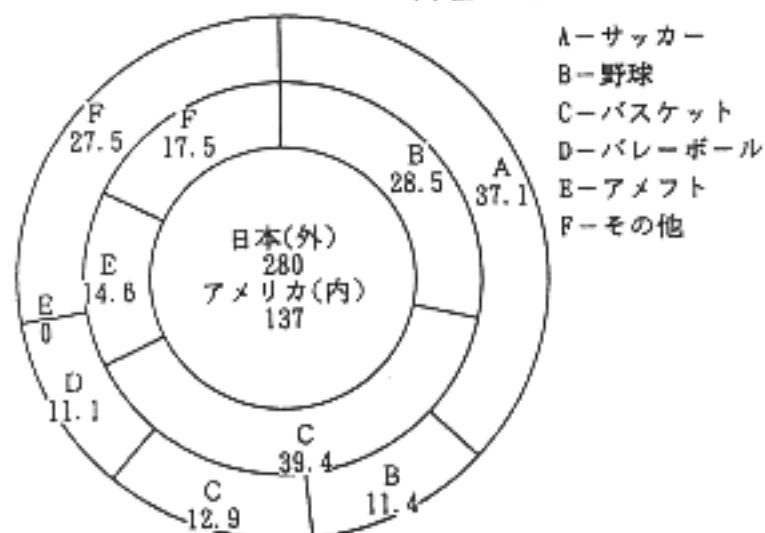
なりたいスポーツ選手(表3)

(単位: %)



ふだんよくするスポーツ(表4)

(単位: %)

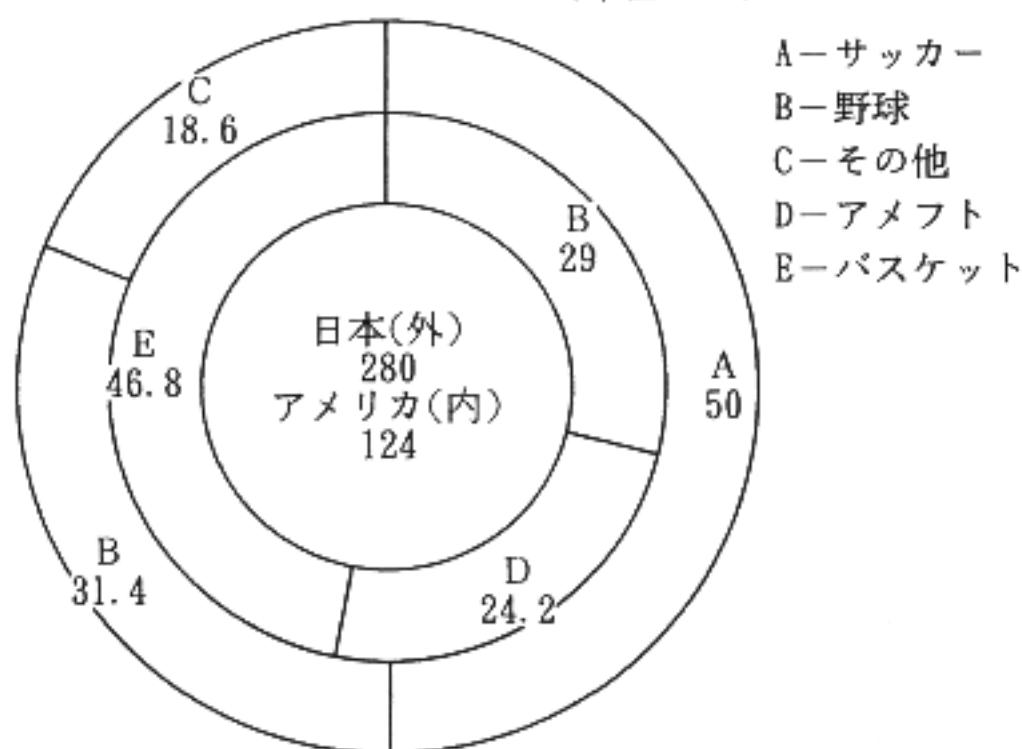


**Q5 よく見るスポーツは何ですか。**

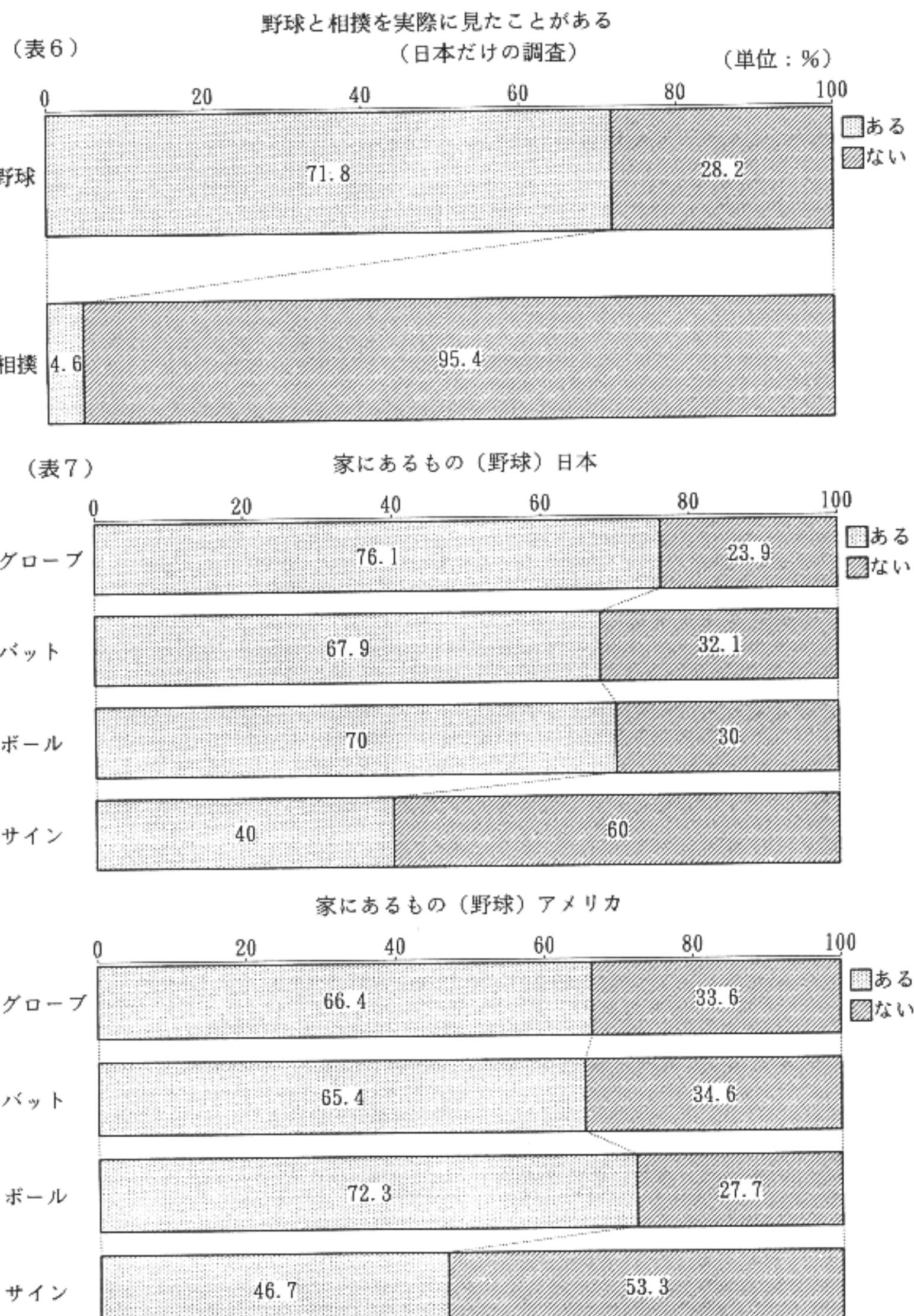
(表5) T V観戦も含んでいますが、やはり同じような結果が出ています。日米の子供達の好むスポーツの傾向は、およそこの3つの円グラフの示すようなものと考えてよいでしょう。

よく見るスポーツ(表5)

(単位: %)



(表6)と(表7)を比較してみると、日本の国技である「相撲」は、野球に比べて実際に(TVでなく)見た経験も極端に少なく、持ち物も少ない事が分かりました。



このアンケート結果をみた日本の3人の子供達がいました。順一と和彦と良子の3人です。3人はこの結果をみて話し合いました。

順一「なんだ、アメリカの子供って日本のスポーツ選手を知らないんだねえ」  
和彦「うん。王貞治だって、僕たち現役時代を知らないもんなあ」  
良子「ペルディのカズを知らないなんて許せないわ」  
順一「だけど、日本もおかしなところがあるよ」  
良子「えっ、どんなところ？」  
和彦「例えば、相撲だよ。日本じゃ国技はだれに聞いても相撲だって言うけど、ほとんど実際に見たことのある人はいないんだからなあ」  
良子「そういえば、あんまり身近じゃないわねえ」  
順一「アメリカの子供達は相撲のことを知っているのかなあ」  
和彦「たぶん、知らないよ。知っていたら、若乃花とか舞の海とか答えるよ」  
良子「ねえ、今度アメリカに行って、向こうの子供達と話し合ってみるのは、どう」  
和彦「いいアイデアだね。今度僕のお父さんが2週間アメリカに行くんだ。ちょうど夏休みだから、3人でいこうよ。」  
良子「でも、英語がはなせなきゃね」  
順一「大丈夫。僕は小さいときにイギリスにいたから、それからも少し勉強を続けているんだ。なんとかなると思うよ。」  
和彦「まかせたよ。でも、ぼくは国技というのが気になるなあ。いったいアメリカの国技って何だろう。野球かなあ、バスケットかなあ、アメフトかなあ。」  
良子「それも、行ってから調べましょうよ」

こうして、3人のアメリカ行が決まりました。

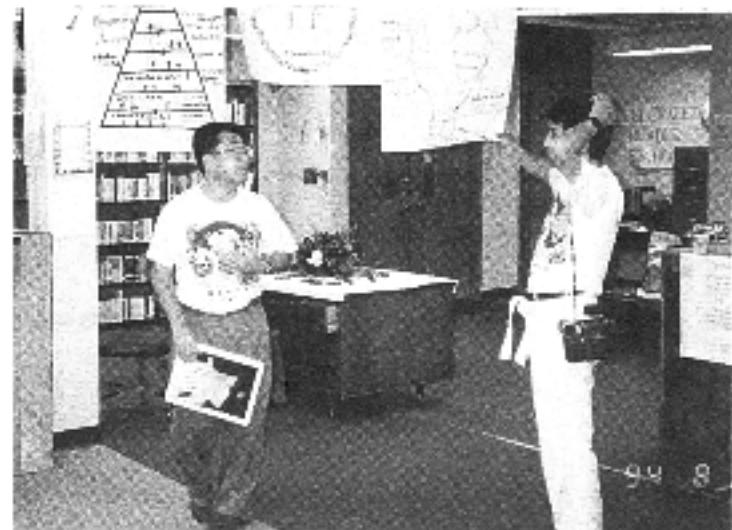
## ☆アメリカ縦断！ SUMO—SCHOOLの旅☆

夏休みアメリカを訪ねた順一、和彦、良子の3人は、アメリカの子供達に相撲を知つてもらおうと、ノースカロライナ州のグリーンビルとミネソタ州のツインシティ（ミネアポリス、セントポール）をまわって、現地の小中学生を相手にSUMO—SCHOOLを開きました。

### 《ノースカロライナの場合》

NASH-CENTRAL-J, H, S, では25人の子供達が真剣に相撲の説明を聞いてくれました。3人は役割を分担し、英語の説明を順一が、VTRや資料の用意を、そして和彦が実際に相撲を取ってみせました。順一は相撲の説明文を3日前からほとんど眠らずに考えました。どんなふうに説明したら、相撲のことをよく分かってもらえるか、3人は話し合いを続けました。

これがその説明文です。



-99-8

相撲を知っていますか。ここにいるほとんどの人は知らないとわたしは思います。しかし日本では相撲を知らない人は、まずいません。相撲は日本の国技です。そしてとても人気があります。とくに年の多い人の中で人気があります。わたしたちが相撲に対して興味をもっている以上に、年の多い人はほど興味をもっています。ほかの言葉で言い換えると、若者にとって相撲は特別人気があるというわけでもありません。大きくなったりときに力士になりたいと思っている少年は、ごくわずかです。少年のおおくはサッカーやバスケットボールの選手になりたいと思っています。

これから相撲の起源についてお話ししましょう。相撲はとても長い歴史をもっています。1500年もまえから行われている伝統的なスポーツです。

相撲のリングは土俵と呼ばれていて、その名前は米を入れる袋の名前、つまり俵から由来したものです。土俵は直径4、5メートルの小さな円で、その中で試合が行われます。

投げられたり、押されたりして土俵から出たら、勝負がつきます。力士の体の足の裏の部分以外の体の一部が土俵についても負けです。基本的な決まり手は、次の4つです。

- 1、相手の体を押す。
- 2、相手を投げる。
- 3、足をかける。
- 4、ひねり倒す。

髪を引っ張ったり、目をついたり、腹を蹴ったり、げんこつで殴ったりするのは反則です。この説明の後で、みんなで一緒に相撲をしてみましょう。そのときにこれらのルールを思い出してください。

ところで、柔道は知っていますか。柔道もまた、日本の伝統的なスポーツであり、また今では国際的なスポーツです。柔道は相撲よりもよく知られていると、わたしは思います。なぜ、柔道は国際的なスポーツとなったのに、相撲はそうならなかったのでしょうか。わたしの考えでは、柔道と相撲との間に大きな違いがあったからだとおもいます。それはなにか。柔道はボクシングやレスリングのように、重量によって階級別に試合が行われます。しかし、相撲には重量別のクラスではなく、力士によっては自分の体重の2倍の相手に向かって行かなくてはならない場合もあります。

相撲のことが少しほは分かりましたか。きっと、多くの質問が残っているのではないかと心配です。しかし、よく言うように、見ることは信じることといいますから、これから相撲のビデオを見てみましょう。

このSUMO-SCHOOLは現地でも注目され、TV局が取材に訪れ、3人の様子はTVニュースで放映されました。

### 〈ミネソタの場合〉

ミネソタではセントポールにあるYOUTH-EXPRESS（日本の子供会の組織のようなもの、ただし運営はほとんどが子供達の手に任せられている）に所属する小中学生25人を、近くのCONCORDIA-COLLEGEに集めて行いました。

ここでは良子が編集した相撲のVTRが人気を呼びました。このVTRは日本を離れる直前の大相撲名古屋場所千秋楽のとりくみで、英語版の実況中継です。しかもハワイ出身の武藏丸が人気力士の若乃花、貴乃花を破って全勝優勝した場面では、アメリカの子供たちから大歓声が沸き起きました。

また、外の芝生の上で、実際に相撲をすることになりました。子供達は大喜びで次から次へと順一や和彦に挑戦します。しかし、体の小さい順一や和彦になかなか勝てません。それは、もちろん初めてだったせいもありましたが、アメリカの子供達は相撲をレスリングのように考えてしまって、相手を土俵の外に出すことよりも、相手を倒そうとするからでした。

この二つの場所でおこなったSUMO-SCHOOLではたくさんの質問が出されました。その中でも、つぎのような質問に答えるには、相撲だけでなく、日本の文化を説明しなくてはならないので、3人は大変苦労しました。

- ・だれが、SUMOを考えたのか。
- ・なぜ、塩をまくのか。
- ・どうして、仕切りをくりかえすのか。
- ・手刀にはどんな意味があるのか。
- ・なぜ、“さがり”がついているのか。
- ・なぜ、四股をふむのか。
- ・土俵は何でできているのか。



相撲が国技として独自に発展して職業化したのは日本だけですが、相撲のルーツはもっと地球規模のものです。

紀元前3000年頃の古代バビロニアの遺跡が発掘されたとき、なんとまわしをつけた2人の男が4つに組んだ青銅の人形が発見されています。また、紀元前500年頃のエジプトのナイルの洞穴の壁画にも、相撲によく似た競技の絵がいくつも描かれていますし、インドの釈迦の伝記の中にも釈迦が相撲を取ったという話があります。

世界中の人々が、人間の本能的力比べとして相撲のようなことをしていたのが、ヨーロッパではそれがレスリングやボクシングになり、中国では拳法になり、日本では相撲になったというわけです。

日本では、642年にはじめて宮廷で相撲を取ったという記述があります。（日本書紀）一般の民衆の間では、農作物の収穫を占う《神占い》の祭事と結び付いて行われていたらしいのです。それが貴族達の間では、神社での儀式のようなものとして発展し、武士たちの間では鍛錬の一つの方法として受け継がれました。ですが、職業として相撲が定着したのは300年前です。

制限時間は4分。この間に力士は何回か仕切りをし、何回か塩をまきます。

「塩をまく」という行為は、土俵の邪鬼をはらい清める、つまりけがをしないように土俵の神に祈る意味が込められています。塩には消毒殺菌の作用がありますし、化膿止めの役目も果たします。1場所でまかれる塩は600kg以上、1人40kgにもなります。

「清めの塩」という使い方をするのは相撲だけでなく、日本人はふだんの生活の中でもこうした「清めの塩」をよく使います。

「手刀をきる」というのは3人の勝利の神様に感謝する意味を表しています。「仕切り」をくりかえすのは、相撲の勝負では「立ち合い」がもっとも大切なため、十分に両者の呼吸を合わせるためです。

「土俵」はもちろん土を固めたものですが、特徴的なのは戦いの範囲を俵で示していることです。俵は米をつつむためのものです。なにより米の豊作を願い祝う日本人の風習が現れているといっていいでしょう。

国技相撲の本場所ともなると、優勝賞品も次のように驚くような品々ばかりです。

アラブ首長国連邦から、ガソリン1年分

セッケン製造の企業からは、セッケン1万個

愛媛県の青果連からは、1リットルのミカンジュース1500本

そのほかに、うなぎ5000匹、牛一頭、などがありますが、もちろんお米も必ず贈られます。その量は、30俵（およそ1トン）

### ◆ SUMO-SCHOOL後の3人の会話◆

順一「みんな一生懸命聞いてくれて、ほんとにうれしかったよ」

良子「ええ、でもけっこうみんな相撲のことはよく知っていたわねえ」

和彦「知っているといつても、TVで見た経験があるというのがほとんどだったけど」

良子「SUMOという言葉だけでは分からない人も、曙や若乃花の写真を見せたら、たいてい分かってくれたもの」

和彦「町で出会った人達も、ほとんど知っていたね」

順一「だけど、どうもレスリングと一緒にしているところがあるよね。『“横綱”はいつアメリカに来て、レスリングの試合をするのか』なんていう質問もあった。」

和彦「相撲の力士は、特徴的な外見をしているから印象には残るのだろうけれど、ルール何かはほとんど知らなかったね」

良子「相撲は海外場所も行っているけれど、どうして有名にならないのかしら」

順一「ただ、日本好きな人は、よく知っていたし、日本に来たときに国技館で実際に見たという人もいた。僕たちは見たことないのに。」

和彦「しかし、くやしかったなあ。」

良子「なにが？」

和彦「ミネソタでのSUMO-SCHOOLで最後に、負けちゃったからなあ」



順一「ぼくは全然負けなかった。体はアメリカの子供達の方が大きいのに、小さな僕が勝つなんてどういうことだろう」

和彦「やっぱり、力の出し方が分かってない感じだったね」

順一「うん。それに、土俵の外に押し出そうとするよりも、投げたり倒したりしようとるんだよね」

和彦「そういうえば、リングが決まっていて、外に押し出せば勝ちというスポーツは、相撲以外にはあんまりないんじゃないかなあ」

順一「たしかに、そうだよね。これ相撲だけのルールみたいだね」

良子「二人とも強かったのは、相手より重心が低いからじゃない。」

順一「どうせ、足は短いですよ」

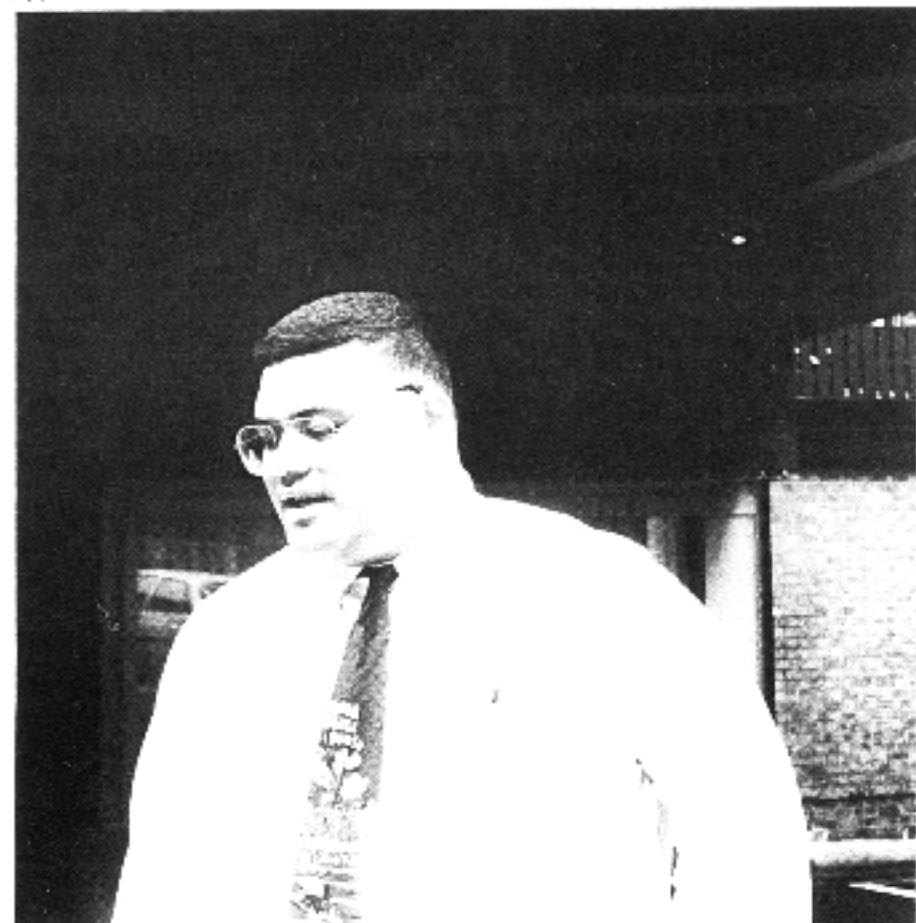
和彦「でも、勝ってよかったです。インストラクターだったんだから」

#### ◆横綱、曙のいとこリック・ロガさんの話◆

曙と呼ばれる力士とわたしとはいとこになります。

もちろん同じハワイ出身で年齢も近いので、よく知っています。彼も私もハイスクールまではアメリカンフットボールの選手でした。私もいとこが横綱になって頑張っているので、とてもうれしく思います。

えっ？同じように相撲界に入ればよかったですのにって。とんでもない！あんな厳しい練習には、ついて行けないよ。それに、相撲の世界の厳しさは、曙から聞いてよく知っているしね。



## ☆アメリカの国技は? たずねたスポーツ店で大論争☆

ミネソタを訪ねた順一、和彦、良子の3人は、この機会に、アメリカの国技について、当のアメリカ人はどう思っているのか調べることにしました。

いろいろな所で調べてみると、およそ半数の人がベースボールとこたえ、バスケットボールとアメリカンフットボールが残りの半々でした。

さて、ミネソタで訪ねたあるスポーツ店では、店員同士の間でこの問題をめぐってこんな論争がおこったのです。

ジョー「アメリカの国民的なスポーツは何かって?そりゃ、もちろんアメリカンフットボールに決まってるさ」

ボブ「いや、おれはベースボールだと思う。」

ジョー「絶対、アメリカンフットボールさ。その証拠にフットボールのゲームはいつも満員だ」

ボブ「ベースボールだって、ワールドシリーズは満員だぞ」

ジョー「たった7試合じゃないか。フットボールはいつも満員で、なかなかチケットも買えないくらいだ」

ボブ「試合数が違うよ。フットボールはせいぜい17試合くらいだろう。ベースボールは年間162試合も1チームはするんだぜ。」

ジョー「じゃメトロドームはどうなんだ、ベースボールの試合よりもフットボールの試合の方が、たくさんはいるぜ。それに駐車料金だって、フットボールの試合の方が高いんだ、知らなかつたろう」

ボブ「なんてこというんだ。このミネアポリスのまわりにいくつベースボールフィールドがあるか知ってるのか。1500以上もあるんだぜ」

ジョー「フットボールフィールドだって、負けないくらいあるぞ」

ボブ「じゃ、地域のリーグの数はどうだ。子供のリーグだけでも、この地区に100リーグ、800チームもベースボールのチームがある。フットボールのリーグはせいぜい20くらいだろう」

ジョー「そりゃ、防具とかいろいろ用具が必要だからだよ。それにフットボールの方が作戦だって高度だよ」

ボブ「そんなむずかしいスポーツが国民的なスポーツといえるのか。ベースボールの方がずっと一般的だよ」



こんなふうに、延々と論議は続いてしまい、3人はあっけにとられたのでした。

## ☆アメリカ縦断野球観戦の旅☆

順一、和彦、良子の3人は、アメリカの国技について、話し合いました。

順一「ぼくは何と言っても野球だと思うよ。いろんな人にインタビューしたけれど、ベースボールという答えが一番多かった」

和彦「それはたしかにそうだけど、“国技”という概念が日本人とは違うような気がするんだ」

良子「そうね。日本では国技というのは『その国の伝統や文化を代表するような歴史のあるスポーツを言う考え方だけれど、アメリカの人は『一番人気のある』とか『みんなが楽しんでいる』という意味で考えてるみたいね』」

順一「とにかくせっかくこっちへ来たんだから、実際に野球を見てみようよ」

和彦「うん。メジャーリーグのチケットは手に入らないかもしれないけれど、2Aならこのグリーンビルの近くに、キンストンインディアンズというチームがあって、明日試合があるから見に行ってみようよ」

良子「楽しみだわ。ぜひ行ってみましょう」



こうして、次の日3人はキンストンインディアンスの本拠地グレインガースタジアムへ向かいました。

入場料は4ドル。入り口は一か所だけ。田舎の小さな球場を予想していた3人は、スタンドに入って驚きました。

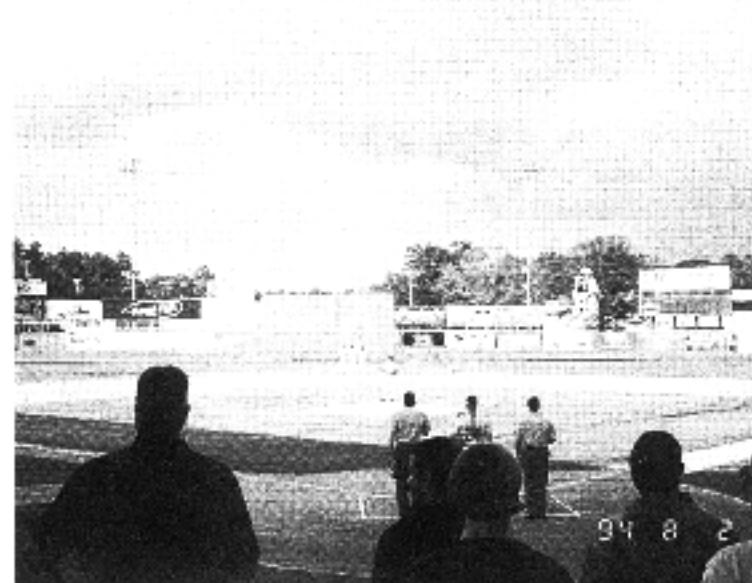
とにかく、活気があって、にぎやかな印象なのです。

この日は、月曜日にもかかわらず、600人の観客が集まり熱心な応援を繰り返しています。座席数はおよそ2000。どれもしっかりしたシートでゆったりと座れます。

地元のインディアンスは3塁側に陣取り、客席も3塁側の方が多くなっています。もちろんほとんどの観客がインディアンスの応援です。

この日はPM7:00からの試合開始の予定でしたが、7回戦のダブルヘッダーでPM6:00開始に変更っていました。

バックネット後方にはアナウンス席があり、実況中継をしています。地元インディアンスの攻撃になると、投球の合間には必ず音楽でリズムが流れ、観客は手拍子で応援します。





また、イニングの合間にはいろいろなショーがあり、観客を楽しませています。たとえば、突然観客の中の子供達が立ち上がり一斉に大声を上げ始めます。これは一番大きな声を出した子にはピザが一枚サービスされるというのです。あちらこちらで子供達が雄叫びを上げる姿に3人は度肝を抜かれました。

また、イニングの間にグランドの中では、短い時間の中で、ユニフォームに着替えたハン

バーガーがプレゼントされるという企画があり、多くの子供達が挑戦している姿に、大人たちは歓声をあげて応援していました。

日本では2軍の試合にはこんなにぎやかな応援は繰り返されませんし、さまざまな楽しめるイベントも開催されることはありません。まさにマイナーなのです。マイナーリーグとはいっても、地元の観衆の声援の大きさとファンサービスの徹底ぶりという点で、アメリカには遠く及ぶません。

順一「すごいね。驚いたよ。まさか2Aの試合で、こんなに盛り上がっているとは・・・」

和彦「まったくだよ。日本では考えられない。やっぱり野球はアメリカだね」

良子「ねえ、せっかく来たんだから、観客の人々にインタビューしてみましょうよ」

順一はさっそく隣にいたおじいさんに話しかけました。

順一 「おじいさん。アメリカの国技は何だと思いますか?」

おじいさん「もちろんベースボールさ。」

順一 「その理由は?」

おじいさん「みんなが楽しめるじゃないか」

和彦 「アメリカンフットボールだと言う人もいるけど・・・」

おじいさん「あれはいろいろと道具も必要じゃろう。ベースボールは広場があれば簡単にできるじゃないか」

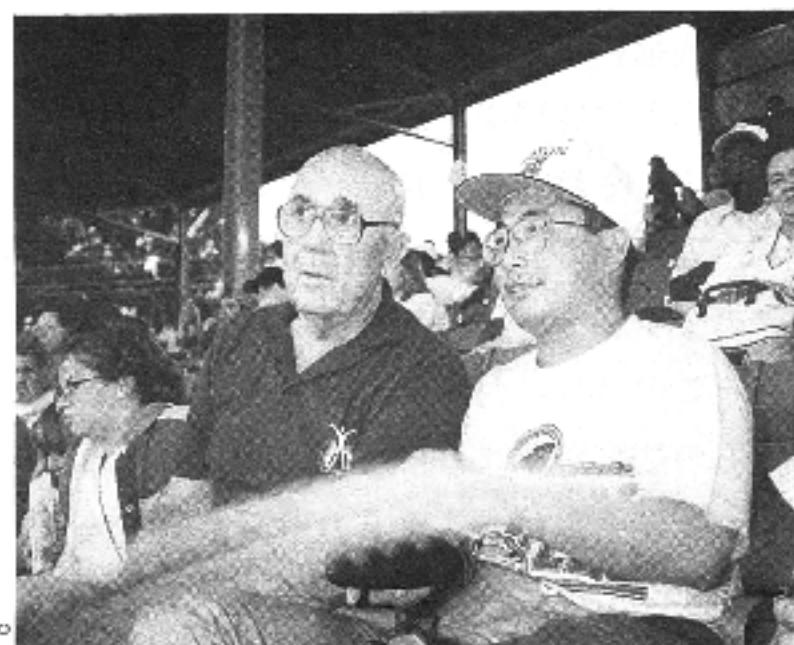
順一 「1年に、何回くらいくるの?」

おじいさん「わしは指定席をもっているんじゃ。

年間25回くらいはくるよ」

良子 「日本の国技は何か知ってる?」

おじいさん「それはもちろんビッグボーイのレスリングさ。何というんだったかなあ」



良子 「相撲、よ」

おじいさん「そうそう、そういうんじゃったなあ」

和彦 「日本の野球選手で一番有名なのは、王貞治だけど、知ってる？」

おじいさん「知らないね、ごめんよ」

ここまで、話し合ったとき、急に球場内にアナウンスが流れました。

おじいさん「ほれ、あんたたちのことを紹介しているよ」

3人 「えっ？」

よく聞くと、こんなアナウンスでした。

観客の皆さん、今日ははるばる日本から3人の子供達が、やって来てくれています。アメリカのベースボールについて調査するのが目的だそうです。皆さん快く協力してください。

まもなく球場内から一斉に拍手が沸き起こりました。3人はあわてながらも立ち上がり手をふりました。観客から暖かい声援が飛んできます。

良子「感激しちゃった！こんなふうに歓迎されるなんて」

和彦「びっくりしたなあ、わざわざ紹介してくれるとは・・・」

順一「張り切ってインタビューしなくちゃあ。あ、あっちで呼んでいるよ」

良子「こっちでも、『来い』っていっているわ、忙しくなっちゃたわね」

和彦「まさにアメリカだねえ」

感激しながらも、大忙しの3人です。



## ☆アメリカ縦断野球観戦の旅(ミネソタ編)☆

3人の次の訪問地は、ミネソタ州のミネアポリス。ここは東京ドーム(東京ジャイアンツのホーム)のモデルになった、ミネソタツインズの本拠地メトロドームがあり野球の盛んな地域です。

### ◆一緒にソフトボールを!

ここで3人の調査に協力してくれるのは、ミネソタ日米協会のポール・シャーバーン氏でした。シャーバーンさんは、3人と握手するやう聞いてきました。

シャーバーン氏「ソフトボールは好きですか」

順一 「ええ、できますけど」

シャーバーン氏「毎週日曜日は、仲間とソフトボールをするんだ。一緒にしませんか。」

ということで、翌日、順一と和彦はどんな試合になるのだろうと少し不安に思いながら、出掛け行きました。シャーバーン氏の案内でついたフィールドはフットボールもできるようになっていました。

二人は「日本のように、きっとバッチャリとユニフォームで集まるんだろうね。体格も大きいだろうしなあ」と話していましたが、ぽつりぽつりと集まってきたのは、ジーンズや半ズボンにTシャツ姿の男性ばかり、しかも年齢も高校生から50歳までばらばらです。さらに「今日は集まりが悪いので、11人で始める」というのです。

3角ベースでなく、ライト方向に飛んだらファールという約束で、キャッチャーもファースト、セカンドも攻撃側が守ればいい、というのです。

順一「こんないいかげんな、ルールでするの?」

和彦「とにかく、やろうよ。野球だから、言葉は通じなくてもなんとかなるさ」

ところが、始まってみると、全員が全力でプレーをします。ダイビングヘッドあり、ファインプレーありの大熱戦。本当に楽しんでいる様子を順一と和彦は目の当たりにし、日本との違いを感じました。



ミネアポリスの回りには、およそ次の数くらいの施設があり市民が自由に使っています。

野球場 1750

バスケットボールコート 500

アメリカンフットボール場 50

アイスホッケーリンク 50

## ◆メトロドームで

翌日、3人はシャーバーン氏のはからいで、メトロドームを訪ねました。試合前の見学ツアーに参加し、当日のミネソタツインズ対ボストンレッドソックスの試合を観戦とともに、たくさんの観客にインタビューすることができたのです。

3人の会話です。

順一「さすがメジャーリーグだね。雰囲気が違うよ。」

和彦「満員ではなかったけれど、観客のほとんどは自家用車で来ていたようだね」

良子「9割以上が自家用車でくるっていうのが日本とは違うわね」

順一「球場の周りに駐車場がものすごくたくさんあるんだ。15000台分のスペースがあるっていうから、平均3人が乗ってきてもそれだけで50000人近いよね」

和彦「入場料は内野で11ドルだから、日本の半分くらいかな」

良子「ただ、売店やファンサービスはにたところが多かったわ。日本がまねしたから当然だろうけど」

順一「おいおい、ファンサービスには大きく違うところがあったぜ。こっちじゃファウルボールはみんなもらえるんだ。日本じゃホームランボールだけだよ。」

和彦「それで、子供はみんなグローブをもっているんだな」

良子「すごかったのは試合前のセレモニーよ。

この回りの少年野球チームがフィールドの中をパレードしていたじゃない。その数がすごく多いのにはほんとに驚いたわ」

順一「このあたりには、少年野球のリーグが100もあるそうだから、チームの数は600から800あることになる。」

和彦「このまえの2Aのキンストン球場でもそうだったけど、試合と関係ないところでの楽しみもずいぶん用意されている感じだね」

良子「観客の人にたくさんインタビューしてみたけど、やっぱり国技は野球だという人が多かったわ。あたりまえかもしれないけど」

順一「もちろん、フットボールの試合で聞いたら、“フットボール”という答えが多いだろうね。だけど、これまで調べてきて、野球というものがどんなにアメリカ人に愛されているか、僕はよく分かったよ。」

和彦「野球だけがアメリカの国技とは断言できないけれど、最も人々に愛されているスポーツだとはいえるよね」

良子「わたしはとても強く感じたことがあるんだけど、日本とアメリカではスポーツに対する考え方方が違うような気がするの。アメリカの人はスポーツを楽しんで生活を豊かにするためのもの、という考え方でスポーツを見ているわ。観戦するときもいろいろ



ろなショーが必ずあるし、個人個人で楽しんでいる。日本のように応援団が盛り上げるというようなこともなかったわ。それでも自然にウェーブがおこちゃったりする」

順一「そのとおりだね。その点日本人はスポーツを鍛えるための手段として、考えている所があるね。相撲にしても、厳しい稽古をつうじて成長した力士には応援者もいて、経済的な援助も個人的に行ってる」

和彦「国技とはいっても、実際に相撲をして楽しむ人はほんのわずかだよね。日本はまだ見て楽しむことが中心だ。」

順一「ただ、野球と相撲の共通する所も見つけたよ」

良子「へえ、どんなこと？」

順一「どちらもメジャーになるまでが、すごく大変な世界だってことさ。相撲だって関取になるのは毎年何十人もいる新弟子の中で少しだけだし、大関や横綱といったら何百人に一人の割合だよ。アマチュアの横綱がプロになっても、すぐに関取になる訳じゃない」

和彦「厳しさではメジャーリーグも同じようなもんだ。日本のように、高校出の新人がいきなりメジャーで活躍するなんてことはありえないし、どんなスーパールーキーでも2Aや3Aからスタートするんだ。」

良子「わたしにはよく分からぬけど、同じように国を代表するプロスポーツとして共通する所があると、なんか安心しちゃう。」

順一「それから、アメリカの野球の試合では、必ず開始前に国旗を揚げて全員で“星条旗よ永遠なれ”を歌うよね。」

和彦「2Aでもそうだったよね」

良子「日本はどうだったかしら？」

3人のアメリカでの調査はこれでおわりました。これを読んであなたはどんなことを考えたり、感じたりしましたか。3人のいうことに驚いたり、共感したりした部分もあるでしょう。

スポーツは万国共通のものです。でも、国の歴史や伝統が違うように、スポーツに対する考え方も異なっているようです。

教室で仲間とこのことについて、よく話し合ってみてください。

きっと、その中から自分の国の文化が新しく発見できたり、知らなかった面に気づいたりするでしょう。そのことで、相手の国の人々の考え方も理解できるようになるはずです。

お互いを理解しようとすることは、自分の国について正しく知ることと同じことなのですから。